

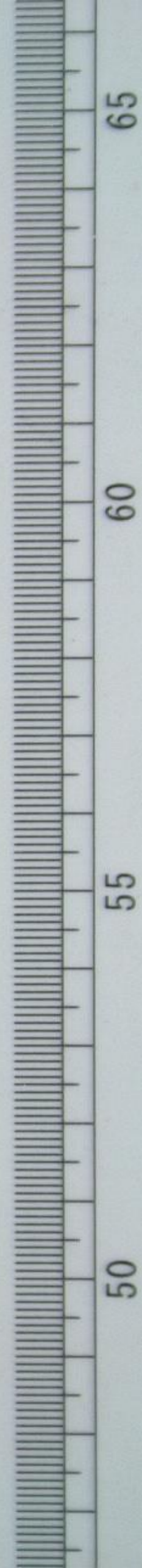
櫻之辨
櫻品

七

13

907

47



13
907
47

梅之辨

櫻之辨

山崎敬義 著

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

倭國之專花ハ桜ニシテ其ノ花ニシテハ此
花種代ヨリヨリケルヤ大山祇ノ女神ノ天ノ
水ノ神ノ木花開耶姫トシテ皇代ノ
池ノ舟ヲ乗リ桜花ノ散リテ盃ヲシテ
宮ノ名ニシテハ平城天皇桜花ノ御製昔在幽巖下花光照
四方。忽逢攀折客。含笑且三陽。送氣時多少。垂陰
何此一物。擅美九春場。
嵯峨天皇

春雨亭叢書

櫻之辨

和仁三年二月、神泉苑の御幸ありて、必を以て免詩を詠

文徳天皇仁壽元年

小倉原の良房の館に御幸ありて、桜花を以て詠し、詩款ありて、

宇多天皇寛平七年神泉苑の桜を以て詠し、菅丞相

供奉ありて、詠ありて、中業平執事

世の中、天喜四年、桜を以て詠し、詠を以て詠し、

紫草子、牡丹を以て詠し、詠を以て詠し、

于武陵、白桜樹の詠ありて、

得花開雪滿枝。和風和蝶帶花移。只今花落道蜂去。空作主人惆

悵詩。萬首唐人絶句第八卷。唐の改陽年、歲前

の桜、善の未折を以て詠し、山櫻先春發。紅莢滿霜枝。幽處竟誰見。芳

心空自知。侶今朝日照。疑畏晚風吹。欲問合彩意。恐驚輕薄兒。

十二行撰。宋の王安石、山櫻の詠ありて、山櫻抱石映

松枝。並以餘花發。最遲。頼有春風嫌寂寞。吹香渡水報人知。

收甫集第二十卷。彼國の櫻ありて、詠ありて、

に我國の櫻ありて、詠ありて、

の桜ありて、詠ありて、

の桜ありて、詠ありて、

の桜ありて、詠ありて、

の桜ありて、詠ありて、

凡_レ櫻桃の_レあ_レや_レ葉の_レや_レ実の_レや_レや_レ皆倭國_ニ生_ルク
 然_レ但_レ其_レ名_ヲ和_シテ_レ子_ニま_リク_レハ_レ荆_ノ花_ト傳_ヘテ_レ全_ク芳_備
 祖_ノ核_桃の_レト_シテ_レあ_レや_レ葉の_レや_レ実の_レや_レや_レ揚_廷秀_ノ櫻_桃
 の_レ詩_ト櫻_桃花_ヲ登_満晴_柯不_睹嬌_饒只_睹多_落盡_江梅_餘半_朵
 依然_風韻_合還_他。ト_シテ_レ核_のや_レ葉_のや_レ実_のや_レや_レ祝_氏事_文類
 聚_テ纂_實の_レ部_ト核_桃を_レ中_ニ廷_秀は_レ花_ノ衆_圍の_レ下_ニ入_ルル_ル花
 之_レ実_ハハ_レに_レ瓜_ニ似_スト_シテ_レ傳_ヘテ_レあ_レや_レ葉_のや_レ実_のや_レや_レ明_ノ林_孟鳴_ハ多_識編_ト核
 桃_ノ外_ニ別_テ核_トシ_テ

番_絲海棠_沈立_海棠_記江_批間_又有_一種_素枝_長蒂_顔色_淺

紅_垂英_向下_謂之_垂絲_海棠_出橋_李仲_遵玉_路花_史 羅_山隨_筆
 曰_{日本}稱_櫻花_曰花_猶言_洛陽_牡丹_成都_海棠_也中_夏詩_文未_多
 詠_櫻花_者我_朝文_字禪_者取_王荆_公山_櫻抱_石映_松枝_詩以_為是_也
 雖_然余_嘗見_全芳_備祖_櫻桃_下載_此詩_則與_我朝_所稱_之花_不
 同_然則_中華_詩人_所詠_櫻花_是櫻_桃也_古詩_山櫻_登敬_燃唐_詩
 白_櫻桃_下紫_綸巾_皆是_歟

櫻之辨 終

櫻
品

熊谷櫻

櫻品

松岡玄達

著

熊谷櫻

彼岸櫻の八重也開事最遅故名花の先登と云ふ
 り昔源平摂州一谷の合戦熊谷次郎直実為先登ゆ此
 花小く色赤或曰又千葉のゆあり千葉雜波櫻に似
 り此非熊谷乃藝花家には揚貴妃也似緋櫻而小也又單
 瓣大輪似芝山櫻而色帶紅暈者呼熊谷是亦非也此乃
 櫻多利

封筒書後書列集

櫻品

垂條トテ一ノ字而不察不知條櫻ハ較條トテ一ノ非垂枝據
 汝南國史地棠花^{ヤマフキ}の條ト垂條海棠ハ襟襟花トテ一ノ今
 の櫻中ノ江戸相谷伊勢等トテ一ノ分明トテ一ノ畢竟今ノ桜ハ
 海棠ノ一類トテ一ノ非櫻トテ一ノ即チ櫻桃トテ一ノ今ノ桜トテ一ノ
 垂枝ト類自別トテ一ノ又按ト垂條海棠ニ種あり同名別物トテ一ノ種
 ハ古来所稱條桜一種ト今ノ桜トテ一ノ是トテ一ノ按ト行厨集花木門ト
 垂條海棠ノ条曰吐條向_レ下花ハ地棠花トテ一ノ今ノ桜トテ一ノ皆茎
 長下ト垂吐條ハ枝トテ一ノ今ノ桜トテ一ノ以海棠譜及圓機活法ト
 一トテ垂條海棠トテ一ノ今ノ桜トテ一ノ行厨集トテ一ノ條桜トテ一ノ

トテ一ノ分明トテ一ノ近世大徳寺ノ花印問之_レ花傍曰垂條海棠ハ法
 桜ノ通稱トテ一ノ重名ノ垂條トテ一ノハ今ノ桜トテ一ノ花傍ノ法トテ一ノ
 トテ一ノ是行厨集ノ説ト今ノ桜トテ一ノ致美ノ櫻ノ辨トテ一ノ誤トテ一ノ以櫻桃
 日本ノ櫻トテ一ノ不知櫻即桜桃而本トテ一ノ非佐久良桜ノ名日本
 所私名而非漢土之櫻也

櫻

彼岸櫻ト一般但無葉トテ一ノ名ト葉ト齒ト和音通ト見活所翁

櫻譜

不斷櫻

一名若木櫻一名節會櫻一名十六日櫻按節會櫻一名十六日櫻伊豫松山大須社前三月十五日正月十五日必開單瓣小花多近來括々他邑之種多接々又繁茂々云此櫻藝州廣島揚州明石の四つ不斷桜名一物多其花似彼岸桜及婆桜葉上元の前後必著花四不斷桜人呼不斷桜按之此乃宋の陸游老學菴筆記所謂小桃紅是也與鳳仙花同名而物異也熊谷桜此種類也歐陽公梅宛陵王文恭集皆有小桃詩歐陽詩曰雪裏花開人未識摘來相顧共驚疑便須索酒花前醉初見今年第一枝

初但謂桃花有一種早開者耳及游成都始識所謂小桃者上元前後即著花狀如垂絲海棠曾子固雜識曰正月二十開天章閣賞小桃正謂此也出宋陸游老學菴筆記曾聞伊勢白子觀音寺庭桜多四季著花名不斷櫻訪問彼地方之人與須磨及藝州一物也楊升菴丹鉛錄陸游老學菴筆記所載正指此物小桃紅出々非桃花程實櫻中一品而小華者也

山櫻

凡山中多單瓣色白開之通々山桜

呼ハク中品類ニ多ク花色紅白ノ二種アリ又著花疎密大
小ノ別アリ第ノ初出青紅ノハは多ク吉世ト云ハク花
密ト云ハク大板山桜ト云ハク花疎ト云ハク

夫木集ノ秋ノ 西行

山桜ミヤマザクラト云ハク人ノ好ムモノト云ハク

芳世桜 見上 西行夫木集ノ

ホノトノ桜ホノトノザクラト云ハク山花ノ余ト云ハク

あハク桜 按ク此條桜ト一物、 公朝夫木集ノ

呼ハク人ノ好ムモノト云ハク人ノ好ムモノト云ハク

児櫻

山櫻ノ中ノ一種單ノ小輪白色疎花者呼見桜洛陽一四仁和寺ニ

王門下東側ノ一株アリ小花ト云ハク一此季花此ノ單瓣 白色

中輪ト云ハク

芝山櫻

一名鷲尾單瓣大輪白色是乃相谷ノ單瓣ト云ハク又一

名ノ大輪粉紅色洛陽智恩院臺所門ノ外右手ノ石階ノ側ト

云ハク夫木是ノノ粉紅ト云ハク桜ト云ハク白色無色ト云ハク

二種ト云ハク

つらて松

單瓣花形大今同芝山大瓣大輪單々但醉色を異
とん芝山ハ白色を今ハ白赤く近く又水色同まて
了ハ醉色あり今秋赤あり芝山と一様なり色
異なり

伊勢櫻

ハ重深紫赤く花弁の本白櫻譜ハ伊勢ハ近尾張之名尾
張ハ終青甲此花諸樹より遅く意を以て誤り此
花開く時彼岸松林次く相合たり或曰伊勢よりハ
赤く宇治頼政の詔伊勢武者ハ緋威のちりて

縁語を以て是ハ附會車依の説なり按て撰州伊勢寺

往古伊勢の極く種々山固玄隣宿直草ノ伊勢寺と云
寺ハありみの神ノまきり境あり寺ハ中ノまきり

往昔左大臣家宗の子伊勢守継蔭の女伊勢と云上達女秀歌
のまきり小金山莊の百首ノ撰り我敷鳥の言の葉乃道

ノまきり得る人の善撰送切なり

金龍寺 單妙山松也

能因ハ我々如月の士に名撰州を龍寺より出る松ありと云
傳草山元政扶桑隱逸傳曰能因者肥後守元愷子姓橘氏橘諸

兄分の風也。補文章生。繼刺肥州。後新髮隱損州古曾部更名能
因。性甚好和歌。偶惜春望金龍寺山路無人落花寂。能因不
知歸。日昏鐘動。時詠和歌。人至今誦之。能因法師

山寺のまの夕暮をみくくしりてあやめくあはれをくらりて

真櫻

損軒花譜曰。摂津國金龍寺。真櫻と云ふ花十餘株あり。花八
重ありて。辨るる。序尾の花より。京都の伊勢桜と同時
なり。

桐谷

一名八重一重一名車返。花中第一品。莫過于此。一枝の中八重と
一重と雜り。其中八重多し。一重少し。此江戸根。其
源。江戸に皆ハ重あり。桐谷ハ八重一重あり。元出于鎌倉桐谷
名。相傳。昔此花を植へて。人ハ八重なりと云ふ。一重なりと云
ふ。相論不決。車を返して。二人觀之。各如所説。因各車返と云

江戸櫻

八重似桐谷。莖長し。垂色濃し。但し。花は。盛過不散。枝を凋
ふ。其形狀不宜。花々。諸櫻の中。之を富貴なり。辨るる。開事す
て。江戸桐谷の如く。酔をみる

法輪寺櫻

江戸の上品也小瓣小輪開くは江戸より西へは原

江戸法輪寺

此法輪寺最豊富重なるは江戸櫻比于之江戸ハ

豊富より桜のつれを江戸桜の原より大輪をあり智恩

院黒門を入右手の小口より二本目まで茶店其下あり

法善寺泰山府君

按是即江戸法輪寺也非別種

殿櫻

單瓣の白五瓣也芝山ハ開く最早殿櫻ハ次之芝山の小輪

白色の且芝山ハ六瓣殿櫻ハ五瓣此其異也

普賢像

花一處ノ攢簇しき芽を色色花中芽ハ何れニ青

芽ニ之固花瓣の間ノ雜出さぬ茶芽を卷葉五六分の長花形点

を不甚張千葉を五六輪一何れも奥州仙

臺より南殿桜より小京都より南殿桜より大輪のりや

塩竈

ハ花と葉と雜出ツ葉より可見の儀を塩竈の傍にすん

美をてしりし... 花形ありし... 瓣を歛る... 牡丹の遠山... 起る小也

太山府君

與虎尾全同但花一處... 花相連至末... 損を多し... 恩院方丈の垣の内より外

茶場の外垣の外より... 谷ハハ... 序尾也

楊貴妃

有二種藝苑家... 色澄紅... 江戸の底白... 此單瓣のもの良有明

有明櫻

單瓣白色又八重より或曰即江戸也種類一物也但比江戸少

糸之

千瓣大輪一處二三花接簇如球一名手袖色薄赤花

瓣大也

大提灯

千瓣白色枝頭接簇此大手袖の垂糸の

手袖 即係括の小輪千瓣

緋櫻

千瓣小輪莖長下垂未開時甚紅開展色淡紅甚似紫菊

此淡紅白暈と楊貴妃と蓋一類二色也又薩州、緋桜

のりより名同花形大異也薩州より琉球より路の鳴

より其形より開ら尤も春初沈爛燉芽自冬生と花形

ハネの紅梅の似甚似と赤杉樹皮全く移さ不及東山泉涌寺

悲田院、一株より願應院所寄予親自擊も但不着花也花師

所呼揚貴妃甚常と呼ぶ緋桜の似る花緋桜より小也小輪

千瓣薄紫の小菊をなるとも、莖の時ハ赤一開放も白一紅

暈より花稀疎花瓣内の瓣ハ不開と中より

樓間

本出自仙洞今處に遍し後水尾院勅命此種桐谷の字を
 うへに名変仙院の樓下の間しは花水江戸重瓣色美麗なり今
 聖護院青蓮院及諸公卿家多接其種士庶の家にも漫水り江
 戸の字は茎短し花形桐谷の字は小輪但桐谷は八重一重ありり
 樓間ハ皆八重中々ありり江戸の字は但し茎短し二種
 昔は桐谷の字ありり樓間の字ありり清水谷教の字ありり予目撃
 するハ早瓣花形海棠の字ありり芝山と大同小異
 虎尾 此花最遅枝條花形甚似泰山府君但虎尾花一處に不翫

大山水蓮

香櫻 千瓣紅色有香氣馥郁なり小輪花疎なり
 若櫻 夫木集頭李秋なり
 若櫻の宮ありり皆非折一本よりはるし美木の極なりなり
 犬櫻 此木葉桜の葉の字は花不足觀小花簇生穂をたす
 即一名南扇桜一名上溝其字實熟するも其色味似杏仁好平士
 塩藏なる名也酒料法山中に多し治東祖園林に殊に多し實六月
 月熟す夫木集頭大桜後頼の款なり

山陰、産け不冬木楨の皮をよむれば、引くべからず

緋櫻 一作火櫻 夫木集躬恒の歌

梓弓をよむれば、山をよむれば、うらむれば、おほくはるれば、おほくはるれば

夫木集信實の歌

秋をよむれば、うらむれば、山をよむれば、おほくはるれば、おほくはるれば

榉櫻 犬櫻の類也 此香楨色、赤千瓣小輪、多花、秀、甲斐、国、及

信州、飯田、の出り、一名、かんの木、より、其皮をよむれば、引くべからず

と、甲中、の、火、の、湯、を、南、此、綱、を、新、画、を、著、く、古、画、を、よむれば、引くべからず

子、本草、細目、の、よむれば、引くべからず、梓、弓、を、よむれば、引くべからず

甲斐の國、の、徳、を、よむれば、引くべからず、此皮をよ湯、一、萬の瘡、腫、腫物

を、よむれば、甚妙也、榉皮散あり

淺茅楨 單瓣、白色、綠萼、開、與、相、谷、同、時、此、綠、萼、也、花、サ、カ

あ、は、草、の、映、一、着、一、見、也、二、種、あり、一、種、を、智、恩、院、の、臺、に

門、の、下、の、角、を、よむれば、此色、白、似、常、花、是、綠、萼、也、又、一、種、山、門、の、前、に

馬場、の、南、側、中、を、よむれば、此、茅、楨、を、よむれば、非、淺、黃、櫻、梨、木

町、浄、花、院、上、の、所、公、家、門、の、内、を、よむれば、花、色、赤、萼、色、也、此、淺、茅、楨、を

よむれば、此物、羣、芳、譜、の、所、載、の、黃、海、棠、是、也、若、水、曰、考、羣、芳

譜、所、説、黃、海、棠、至、于、終、紅、を、變、と、今、此、邦、所、有、不、變、與、是、異、也

不可克之也

黄櫻 八重大輪色茶色

霧谷 以下出地錦抄。形状不詳者多。暫載于此。以俟訪問。

程、南殿 岩石 正宗 爪紅 関山 以上未詳

奈良櫻 此八重櫻也。伊勢大浦々歌又

~~~~~

~~~~~

車返一 即相谷の異名

緋麟櫻 仁和寺 金王

鷲尾 即芝山の別名

名嶋 萬葉粉紅小輪此亦普賢像の萬葉を~~~~~の字

殿櫻 單五瓣白全く芝山~~~~~芝山の變也芝山も開

時最早く輪大~~~~~六瓣殿~~~~~開~~~~~次芝山輪小~~~~~

~~~~~五瓣此其異~~~~~

江戸法輪寺 江戸の法輪寺より出此花江戸~~~~~花を宿

~~~~~大~~~~~觀也

三度櫻 賀州金澤神社の前~~~~~一度開く花此

不銜櫻の類~~~~~勢州白子~~~~~桜~~~~~四時

着花名木なり白子の内寺家村観音寺の内より此櫻の事

貝原損軒壬申紀行より勢州白子の下り載之

鷺尾 藝園家より単瓣大輪白色の物を鷺尾と云く芝山より

相似る重瓣中輪より訪問より芝山鷺尾一物二名

を以て

相似る櫻類

楊貴妃より悠々として水より揚貴妃の少きあり茎短く酔紅

色より花小也醉海棠今より徐々よりハ鋪をかくて

了茎を

泰山府君より尾より尾ハ花稠密て多き本より

の若花より成結花形より泰山府君ハ花より

事不禁此其異なり

江戸の法輪寺より全一様花師の雜辨より江戸ハ茎短咲初め

時より早く開放の後渋紅より法輪寺ハ重なり茎延て長

く密花最遅

薩州排櫻 薩州鹿子島より琉球より遠く三千の島より

より行此より正月上元の花開く京都の排櫻より別

種也花ハ八重紅梅より正月半の開く紅梅より此種

今東山泉涌寺中悲田院の存ありしゆりゆり花不_レ暖園の木
京都の寒地へ移_レ来_レたり木不長予悲田院へ往_レて觀_レ目撃すに
葉ハ全_ク此地の櫻葉_ニ似_テ

五所櫻 越後より千辯ゆ_レ一苞五花一所あり_テ大務大
辯甚美_クゆ_レ餘_クゆ_レの如_ク

竟惠萬葉草木異名所出櫻名 ちげ櫻 りふ櫻 吳服櫻

みや櫻 見櫻 り櫻 夜櫻 じ櫻 月櫻 染櫻 紅櫻 ち櫻

遅櫻 ちの櫻 ちん櫻 うと櫻 そく櫻 夜櫻 しの櫻

ちへ櫻 花櫻 林櫻 さん櫻 糸櫻 ひ櫻 玉櫻 ちえ櫻

い_レ櫻 九重櫻 八重櫻 夕月櫻 ちえ櫻 六月櫻

以上 按此諸名悉く櫻の名に非_ズ或ハ時を以_テ名を著_ス非_ズ
一様歌人の歌の初あり_テ以其有櫻名故併録于此

本より櫻 信實

ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻

武古山櫻 公朝

揚屋の落や_レち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻

片山櫻 同人

且妻の片山櫻_ニ似_テる櫻あり_テち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻 ち_レ櫻

夕山櫻

有家

夕山櫻の樹は山に生れて夕陽を映はるるを以て名づく

白樺櫻

仲正

白樺櫻の樹は白く花は紅くを以て名づく

中川の櫻

為家

中川の櫻は中川のほとりに生れて水を映はるるを以て名づく

岸の櫻

俊惠

岸の櫻は川のほとりに生れて水を映はるるを以て名づく

以上出夫木集

附 名所櫻

南殿櫻 一名左近櫻

近接別有子。南殿櫻者。一名上溝。即大櫻異名也。與此絶不同。

東齋随筆草木類條曰南殿の櫻ハ本是梅の樹也 桓武

天皇遷都の時植へし 仁明天皇承和年中ハ

枯失し 櫻の木をあらわし 植へし 其後天徳四年九月廿

三日内裏焼亡し 造内裏の時式部卿重明親王家の櫻と稱

し 植へし 件の木をあらわし 吉野山櫻也 枯失し 遷都

以前此地橘大夫の家へ移りて 有し 禁秘抄云 南殿櫻在紫

宸殿巽角是大畧自卓創樹也 貞觀此樹枯 自根挿菊坂上

瀧守奉 勅守之枝葉再盛云々○康保元年正月被裁。則枯。十一
月又被裁云々。一重明親王家樹。一自西京移裁之近樹。堀川院
御宇已來木也。

歷代編年集成天徳三九 廿三の記曰。南殿櫻樹者本是梅樹也。桓武天

皇遷都の時所被植也。而及承和年中枯失。仍 仁明天皇被

改植也。今度焼失畢。造内裏之時。所被移植李部王重明親王家櫻
也。

園大曆曰。延文二年。三月十九日。今日南殿波栽櫻樹。殊絶

美花也。号鎌倉櫻。建按。鎌倉櫻疑是當代所稱呼。桐谷者。秋。桐谷。鎌倉谷。七郷之其一。

也。此花本出干
此因名之云々

南殿の櫻を本府より植侍りけり時大内の花の権侍
ハ續千載集右近大将為教の歌リ

つゝ人の言井の桜のやあはれ又さうあし代を

續撰吟負敦親王の歌リ

まのしやゆ階のさくらゆけは糸目さくら新のまらうさか

吉野山 戎作芳野 大和巡覽記曰 筑前見原 凡此山ハ六

田の方麓より奥院より百余町の間民家と云はれ左右

並木の櫻なり又左右の傍と下の谷と左右のわけを

谷底に多くて山頂まで春は霧より先花咲初しく樹く山は深
 のりつと奥の院に終る霧のを盛るる中のを盛るる上のを盛
 開く其間大やう三十日計なり又晩櫻ハ霧よりの住く春の
 季奥の院のを盛の比盛の開くあり初櫻ハ高さはありとて
 たり凡此山の桜ハ皆一きなりハ幸極ハ山中及び民家僧房一株
 あり寒風ハけりさ年或ハ風雨久く續けらるる空を
 均しく好言あり山僧曰此四十年前ハ今より此山の桜多
 く今もむりり桜あり山僧又曰凡此山の花上中下一時と

不開よりくち中より立春より六十五日と考へ此を盛景中と
 又甲人語くこの桜此くの但年の寒温より速く
 町より前の桜多き此の華より吉野の町より東の方の山
 の桜より前にあり桜の盛此よりたのその内前より向方
 より右との方二十町りり只一目と見えればをの林を面白
 くに思ふなり方々雪の暖く只の白く
 此は花の多き咲くつひに居世の外物やとあり
 凡櫻ハ雲透見えたりとあり山のとて又谷底より
 此は花の多き咲くつひに居世の外物やとあり

谷の底ありて草木はさかしくして人ハ大なる盆ありての肉を
 へてて侍と我の目も度るなりハ大和より少くならん
 ハる好座ありて其外のみ一國のみありて予守り
 上の花ハ色々此山々根を切りて甚き根の本を新くを
 樵夫想をてて若新の内根ありて里人ハ其をてて
 里人の倫根をてて其の神ホ一々怪しく
 とも侍ハ神崇を畏く故より南遊記行同柳の宿よりハ吉野
 川の宿より茶屋ありて目を眩む此山より吉野山の
 なる一の坂を上りて右の方ハ千手明神の社あり既に盛ん
 ゆり往ハ道筋ハ並木の根あり左方の山ハ名ハ極多我の
 へてはありて一徒者目を驚き行士と聲の町のか下より上市
 の方より上りて七並り坂の上より道より下りて日本
 寺と名付しありて根の甚多盛んゆりてありてカ行ハ
 放すてて異てててててててててててててててててててて
 一ありて明日ハ能く静又すててててててててててててて
 へてあり今宵ハあててててててててててててててててて
 の院の方より丸極のありて侍の者ありて侍を子守社を
 までハを盛んててててててててててててててててててて
 の方ハ山ありては甚多ありて其の院

一ハちう一西度往ぬ今日ハ日ハ傾る又花多き戸へきぬ内ハ
 んとく此屋ハ奥の院へ登ると平ハひたり金性大明神より板を下
 如意輪寺の方へりけいこくも多し夫より降ると吉水院へ
 へて堂中をん夫より家へりぬ日とて没せり吉野山の
 予ハ大和巡覽記ヲ移し記しぬ不記あり廿日昨日より
 了今朝の曙のそとんとちひしへ吉野の旅全を出すの期
 せしむるありまふり日本へそとて谷狭の峯目のおと
 けをいぬありしそとて身へり其多きや葦千株よりふり
 ありけ其多きの面白言のりふりぬとて取物



ちうとてかへりし曙の曙とて夫ハひし白とて書と多し
 又しぬとてけしき多しやふりしとて海内奇觀とて
 ハとて中華の佳境を記し其記とて寺系勝地ありし
 こと其内ハ各けし不記大庚嶺の梅ハ名ありし
 記とて者なり此とてけしとてけしとてけしとて
 うとての予絶たしとて非しとて此世とてけしとてけしとて
 昔とて昔見しとて此世とてけしとてけしとてけしとて
 道奥の院の鐵水とてけしとて花の盛とてけしとて今此とて
 の花最多く盛とてけしとてけしとてけしとてけしとて

時を重祢くあんな事と期きけり今や今もくく此時よりあけり
あけり外の外あり我年改六十もあけり重祢ハ必期きと此度
誠此をいふ別れもあけり名残不憚りもあけり久しき体
いづくに雑い依り拙い詩をい出んと教いけりやあはれ宿を
出六田より葛城山へと志とく

西三條稱名院吉野詣記 文繁故不録此
稿書其和歌

眉間寺法律櫻盛なり 紹巴

按多ぬけりゆのゆいあま風のくく柳の條をいりりり

稱名院

孫いさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いさよとまいさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



紹巴

いさよとまいさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

稱名院

いさよとまいさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

伯依寺いさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

稱名院

いさよとまいさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いさよとまいさよとまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

古寺の多し橋やそとのまゝくみこもさしよくくはく

あてそけい山の快しうしやのよもろもあはれけり

紹巴

すまの目も西をさし草津やさきさきけり

芳野

梅名院

晴らうり散りば松の影ふりやそもさき無き山つ柳

ゆきもまらうけりけり人ともけりけり

あししそまへけりま散りそまのあしは松のやわきりん

アキ百むの内とれをせしあしりてあまもりあま今三

とま甲とまの内とけりけりそまのあしりん

梅名院

いさしうりけりけりけりけりけりけり

紹巴

あまの芳舟もさしけりけりけり

梅名院

佐伊冊のあけりけりけりけり

いさしうりけりけりけりけり

あまの芳舟もさしけりけり

迎客燕諒春

水無瀬

あけやけのしづかき

嵐山の櫻千本山城名跡志曰 龜山院此河吉野山の櫻

うけりてあけのしづかきと此山縁和歌有花紅葉而今無詳見下の千本櫻

須磨櫻 摂州須磨浦若木櫻名木也夫木集定家歌

移りてあけのしづかきと須磨の関やのあけのしづかき

尾上櫻 小倉百首前中納言匡房

高砂の尾上は桜咲きけり外山はさくらもよみよみ

高砂櫻とこのころ後撰集素性の歌

小塩山櫻 夫木集隆祐の歌

大系や小塩の山はさくら咲きけり

志賀櫻 夫木集 後鳥羽院

志賀の山はさくら咲きけり

実蓮

志賀の山はさくら咲きけり

西行

最初13の山はさくら咲きけり

出夫木集

狩場櫻 丹後宮津より昔保昌、狩り所和泉式部、植し、後と

了今より保昌ハ式部、夫より丹後の住と此は、極し

推古櫻 藝州廣島より上古の本、此様、推古櫻と

ソノ福、作れ、口傳

雲林院櫻 夫木集 西行歌

ソノヤ、ソノヤ、其の音、ソノヤ、ソノヤ、ソノヤ、ソノヤ、ソノヤ、ソノヤ

普賢堂櫻 又稱十本櫻 山城名勝志曰。在千本閻魔堂。世謂普賢像。宜

胤卿記云。文龜二年。三月九日。詣千本念佛寺并普賢堂。櫻盛也。

親長卿記云。明應四年。二月十三日。參詣千本釋迦堂。遺教經聽

聞。次千本櫻一覽了。般若記百首謝人惠櫻花詩并叙。橫川○櫻

之於我國也。不曰櫻而云花。如洛之牡丹蜀之海棠。盖所以貴之

也。普賢堂天下第一也。世傳鎌倉有普賢堂。按其地有櫻。俗謂之

普賢堂。或曰普賢像。和訓鼻與花音同。花之白且大者。如菩薩所

乘白象之鼻也。兩說孰是。平安城之西。有此櫻。實名花。萬年之

距此地也。里許近。而每到春時。携客出遊。何可一日無此花耶。自

丁亥之亂。東西鴻溝。不見普賢堂者。七八年于今矣。距步之間。雖

花如歎。青春負公乎。公負青春乎。不可得而知也。今茲甲午。西人

乞降軍。退解圍。不亦悅乎。今日有客惠櫻花者。所謂普賢堂也。予

與花一咲知十歲之舊可異哉。不啻生逢太平日而得見此花幸
 之又幸也。感喜有餘。作詩謝之云。七年不見普賢堂。蝶亦東西難
 過牆。亂後逢花春似夢。一枝晴雪滿衣香。小補絕句。春暮看花普
 賢堂花。横川杜宇聲。中春欲闌。城西樓雪一株殘。人生易逐落花
 變。暗想明年子細看。

名所櫻

以下皆非一本之名
 泛指其地所有之花

西行櫻 長嘯子の西山山家記云小塩山の麓了蘭若あり勝持寺
 と書けり。小野道風額ありかり方丈の前了西行の植と云付れ
 老木の松あり朽殘りたのこころと云て春を告げぬらんともわらふを
 了嘯子

了嘯子 此花のこころは

長嘯子

山より花をさかして花をさかして花をさかして花をさかして花をさかして

此

衛門櫻 愚按古歌了園は名所たの非指一本按山城名跡志卷八
 衛門の御息所の第古在太秦後選集衛門の御息所の家左秦二
 侍けりてその花面白きと云て折るをさかして花をさかして花をさかして

山甲より散る花をさかして花をさかして花をさかして花をさかして

返

白ひかりは花の香りとて水けは花の香りとて水けは花の香りとて水けは花の香りとて

愚抄此歌...好幸の寺...所名歌

小督櫻 在山城嵯峨天龍寺西林外三軒茶屋東相傳小督の局

高倉院寵愛の女房也建礼門院父平相國清盛甚妬之將殺之小督

竊逃禁官栖于此處此其庭前之本也按非此處在大井川西法輪寺

東北松林是其跡也小督事詳平家物語山州名勝志小督櫻在龜山

邊小督者櫻町中納言成範卿女也其前為冷泉大納言隆房卿其官

為少將之時之妻也因有美容高倉院召之少將潜大怨故平相國

云失小督見盛表記後有雜染折清間寺籠居大原別墅之說或說

懸衣此櫻投身於大堰川山城名所記行

墨染櫻 墨染の邑名山州紀伊郡深草南伏見の路あり今

伏見の墨染...山城名迹志...古今集

上野拳雄、抄

此抄昭宣公薨去の時表傷...彼桜樹...悲嘆

詔公ハ太政大臣摂政後一位基経号堀川大臣寛平三年正月十

九日薨り謚昭宣公葬于深草邑

古今集詞書ノ堀川の...身...深草

ノ收...今墨染寺...其庭...此

考の後に佳しきものあり古ハ墨條の色一面の郊原に有櫻樹數
 百株と多傳ふ或説く此秋の感に櫻花墨色と云ふことあり
 可笑山城名迹志に花のりり思ふことありと云ふ事得しきものあり
 瞽説強き事ありと云ふ老成者も此の事ありと云ふ事得しきものあり
 例ふに此秋の暮の衰傷の暮に花の色を喪服の色をあらはせし事あり
 ありと云ふことありと云ふ墨條の事ありと云ふ事得しきものあり孟子曰讀詩者不
 以詭害詩人之志と云ふものあり世續物語に今くありと云ふ事得しきものあり
 圓融院
 右の秋に墨條板面白くありと云ふ事得しきものあり
 墨條の事ありと云ふ事得しきものあり

山城名跡志曰墨條寺の下に古寺あり吉公衣冠画像あり長谷川等
 伯の筆ありと云ふ事得しきものあり

ありと云ふ事得しきものあり
 右の秋に先細川古昔の所ありと云ふ事得しきものあり
 自筆の短冊ありと云ふ事得しきものあり
 秀吉公是を賞しと云ふ事得しきものあり

千本の櫻

非櫻名嵯峨嵐山の桜の總稱あり靜庵雍州府志云古植千本櫻於
 嵐山而摸吉野山之景且建藏王権現至今櫻所殘堂迹絶
 渦櫻 非專指一種古歌多於鞍馬山花詠名馬少雲株と云ふ事得しきものあり

くそゆき〜〜鞍馬の山に雲抹桜はけけ〜〜徳世の歌に或説山
風は清く〜〜花の飄〜〜空を〜〜を渦〜〜り〜云
〜〜附會の説〜〜

祓雲抹櫻歌夫木集

定類

〜ゆき〜の青〜は〜〜〜鞍馬の山〜

袖中抄云雲抹櫻ハ唐鞍の雲抹〜〜鞍馬の録〜〜

駒〜櫻 青蓮院の内〜〜の桜〜〜

行幸櫻 山掛地藏院の庭〜〜梅の中〜〜行幸〜〜紅梅

〜〜同名別種

七本櫻 紀州高野山金堂の前の櫻と七株の桜〜〜損軒南遊

紀行〜〜

交野櫻 南遊紀行の禁野交野郡也名は〜〜是昔 天照太神の祭

の供御の備〜〜科の鳥を捕〜〜又 天子の御狩場を〜〜人

の狩〜〜禁野〜〜

新古今集

〜〜やん〜〜の〜〜桜〜〜の〜〜

と俊成の詠〜〜此〜〜の〜〜

汀ミナの櫻 又曰大原の深光院ハ草生村ハ在西の方の谷の中〜〜

まはらまら 此寺に建礼門院の御木係系、阿波の局の本係より建
 礼門院の陵ハ寺の厨の少く多きは、あつた小なる墓より堂の前と
 昔ハ小池あり汀の極く池のふちより極あり、今ハ池の極み
 一命の山其の峰、緑林より建礼門院の極の是は、
 〇〇と 後白河法皇の下より見あひ、山はあり、里人名付け
 翠巖の山、云具原益軒公前西北紀行より出たり
 地主櫻 東山清水寺の内北の方の上よりあり、石階を経てのち、地主
 権現の社あり、玉垣の内外より五六株の極あり、伊勢極相谷より、
 寺の極より、此は極遊屋と云謡曲より載る名あり也

東山櫻 損軒南遊紀行、藤森の社、皆く、稻荷東福寺の門前
 をとく、東山の花をえん、大佛より清水寺高臺寺祇園智恩
 院より、櫻の花半八重少くあり、水より、今日既く感く見
 え、春より、就中高臺寺の内延徳院のを
 最より、凡此度の旅行、今より佳境は、
 〇〇と、特更の烟景伏見の桃花又見、慣へ、
 〇〇と、目を驚き、東山の櫻より、流石都り
 〇〇と、
 清水寺櫻 地主櫻 清閑寺櫻 仁和寺櫻 祇園櫻 高臺

寺櫻 延徳院桐谷 月心院櫻 安井櫻 長樂寺櫻 靈鷲山櫻 又呼國 阿櫻 雙

林寺櫻 圓山安養寺櫻 大谷 鳥部野櫻 智恩院櫻 妙

覽寺絲櫻

以上當世名花

阿蘭陀人ノ桜もろわ阿蘭陀咬啣吧大小西洋ノ處皆有之

彼方草木ニハ實ニハ珊瑚珠ノ如ク先其名をカ

イスウフロモン

櫻品 終

早稲田大学図書館

011888006453